

氏名	やま だ ひろ あき 山 田 弘 明
学位(専攻分野)	博 士 (文 学)
学位記番号	論 文 博 第 287 号
学位授与の日付	平 成 7 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 2 項 該 当
学位論文題目	デカルト『省察』の研究

論文調査委員 (主 査)
教 授 藺 田 坦 教 授 山 本 耕 平 教 授 長 谷 正 當

論 文 内 容 の 要 旨

本論文(創文社, 1994年刊)は、デカルトの名著『第一哲学の省察』を中心に取り上げ、その詳細な解説と注解を通じて、デカルト形而上学の全体像の把握を試みたものである。論者はここで、デカルト哲学の含みもつ諸問題に首尾一貫した解釈と説明を与えるとともに、近現代における多くのデカルト批判に対しても一定の検討と解決を企てる。本論文の叙述は、六つの省察の軌跡をほぼ順を追って辿りながら、それらにいわゆるランニング・コメンタリーを付するという形をとり、内容的には3部13章をもって構成されている。

第1部は、第一・第二省察を中心にして、懐疑・コギト・明証性など認識論的な問題群を取り扱う。

第1章では、まずデカルト的懐疑の射程と意味が問われる。デカルトにおける懐疑は感覚的な知のみならず、公理や数学などの明証的知識にも及ぶラディカルなものである。だがそれは、しばしば批判されるように、いわゆる錯覚論法に陥るものでも、また文字通りすべてを疑うのでもない。デカルトの懐疑はむしろ仮設的なものと考えられる。つまり感覚や公理をかりに偽なるものと設定してみるのであって、公理について言えば、そのとき疑われるのは、それが絶対に確実な学知となり得るかどうかであって、私の確信としてそれが明晰判明であること自体は疑われていない。確信の知は、ここではいわば作業仮設として推論の重要な足場となっている。このように解釈することによって、懐疑論にまつわるパラドックスは避けられる。

第2章では、*cogito ergo sum* (以下、コギトと略称)の解釈がなされる。まずコギトが導出されるプロセスを整理分析し、ついでそれがある種の推論をなしていることを示す。コギトを直観とする通説は、直観の意味が明らかでなく、反証も多くあって、それだけではコギト解釈として首尾一貫して維持できない。むしろコギトの直観には、暗黙裡に推論が含まれている事実があり、従って直観説を一面において認めながらも、コギトは全体として推論をなしていると解釈される。この解釈は、いわゆる行為遂行説をも吸収すると考えられる。

第3章は、コギトが明証的であること、また「私は思惟するもの (res cogitans) である」ことを問題とする。まず明証的という語の用例を検討して、認識の直接性、合理性、真理性などの意味を検出し、ついでコギトの明証性は、単に主観的でプライベートな事態ではないと考える。なぜなら、万人において理性は共有され、しかも理性の背景には神の誠実がある以上、コギトの明証性は普遍妥当的であり、いわば相互主観的な広がりをもつと考えられるからである。さらにコギトの明証性と神との認識論的な力関係を吟味し、前者が神の保証を要しない特権的な真理性をもつことを示し、最後にコギトから「私は思惟するものである」が導出される論理が正当であることを論じる。

第4章では、明晰判明知の規則といわゆるデカルトの循環を問題にする。デカルトが「明晰判明」の意味を確定し、コギトからこの規則を立てる経緯を顧みるに、その定立は神による検証以前では暫定的なものにとどまり、神の誠実を後楯としてはじめてこの規則は真理基準の条件を充たすことになる。デカルトが神の保証以前にこの規則を使って神の存在証明をしているとするなら、それは明らかな循環となる。この周知の難問については、諸家によるさまざまな解釈が試みられてきた。だが論者の見るところ、この規則は少なくとも第三省察の証明で直接使われている形跡はなく、第五省察の証明においてはじめて有効に機能している。その限り、循環の疑いはないと考えられる。

第2部では、第三・第四・第五省察をテキストとして、主として神に関する諸問題が取り上げられる。

第5章は、その序論として、そもそも哲学においてなぜ神を問題とするかを考察する。デカルトのいわゆる「哲学者の神」に対しては、パスカルや、またカントの批判がある。しかしデカルトにとって、神を論じることは人間の認識の基礎を据えるべき形而上学の重要課題であり、それが『省察』において満を持して展開されているのである。この見通しのもとに、とくに第三省察のテキストの分析から、神が登場するにいたる必然性が跡づけられる。

第6章は、観念をめぐる諸問題を扱う。神を論ずるに際して、デカルトはまず観念から始めたからである。最初に、観念を手がかりとする17世紀の認識論の構図を確認した後、デカルトがスコラ的認識論の伝統的な「志向的形質」などの概念を批判し、観念を人間の「思惟内容」の意味に定着させたことを歴史的に明らかにする。次に、いわゆる生得観念に関して、デカルトにおいて生得的とは、われわれがある観念を生まれつき顕在的にもつことではなく、それを潜在的・可能的にもつという、いわば素質生得論を意味することを論じる。さらに生得論の根拠には、私が神の似姿として創られ、真理も神によって創られたという神学的背景があり、この説の認識論上の重要性が、ロックらの経験論と違って、経験によらないアプリアリオリな知識の主張にあることが示される。

第7章では、神の存在の第一証明を取り上げ、なぜ神の場合に限って観念 (idea) がもの (res) として実在すると言えるのかを問う。デカルトの戦略は、第一には表現的実在性という独特の概念であり、これによって観念は一種の論理的存在であると認められる。第二には因果律であり、これによって観念の表現的実在性ともの (res) の実在性が因果的に結ばれる。そして第三には実在性に大小の程度を設け、もの (res) の実在性の程度がそのまま観念の実在性の程度に反映されるとする。かくして最大の表現的実在性をもつ観念 (神の観念) の原因は、実際に最も大きな実在 (神) 以外に考えられないことが証示される。こうした戦略の根本には、表現的なあり方における観念をすでにある種の実在とみなす論理があることが指摘される。

第8章は、神の存在の第二証明とその周辺の問題を考察する。まずその証明の根幹をなす時間論と連続的創造説を分析し、そこから時間や存在を非連続なものとする伝統的見方に基づいて、私を持続させる原因として神の存在が必然的に要請されること、しかもそこに神を自己原因として自らの力によって存在するものと見るデカルト的解釈があることが確認される。さらにここには、神の観念のいわゆる刻印という考えと、欺瞞者ならざる神の発見とが結びついていることが指摘される。

第9章は、第四省察をテキストとして誤謬と自由の問題を考察する。デカルトの非決定の自由に関する議論には不整合があるとの指摘がなされてきた。だがデカルトにとって、自由とは本来、自発性の自由であって、消極的にせよ積極的にせよ非決定の自由のことではない。非決定が自由であると言うのは、非決定に実践的な有意味性があるからであって、それが人間の自由の本質であるわけではない。非決定の自由は依然として低い位置にとどまるのであり、この限り不整合はないと考えられる。

第10章では、第五省察をテキストとして、神のいわゆる存在論的証明と知識の確実性を論じる。デカルトの存在論的証明の最も問題な点は、なぜ神の本質から存在が引き出されるのかであるが、要するに神という最高の完全者には定義上、特権的に存在が内属しており、この証明は神の本性のうちに隠れていた属性を外に取り出して顕在化する手続きに他ならないと解釈される。そしてこの証明は、第三省察以来の議論を踏まえた最も完成した証明になっていると考えられる。さらにここで、すべての知識の確実性が神の認識に依存するという事態の認識論的な意義が考察される。

第3部では、第五・第六省察を対象として、物体および心身の問題を考察する。ここでの議論は、これまでの認識論的な次元から、より実践的・身体論的な次元へと進むことになる。

第11章は、物体の本性と存在について四つの点から論ずる。第一には、物体から第二性質が剥奪されて、延長のみがその本質として取り出される経緯が分析される。第二には、この常識的には自明と見える物的世界（外界）の存在を問うことの意味が、歴史的およびデカルトの問題意識において解明されたのち、第三に、デカルトの物体の存在証明における想像と感覚の問題をめぐって、とくに感覚の意味が見直され、身体論的なレベルにおいて大きく肯定される事実が目される。しかし第四に、こうした、もっぱら身体論的論理によってなされる外界の存在証明や懐疑の解除が、第一省察以来の認識論的論理とのある種の不整合をもたらしていることが指摘される。

第12章では、いわゆる心身問題を論じる。ここではまずデカルトにおける心身の区別が、実体レベルでの実在的区別の意味であることを検証し、他方また心身の合一という事態が、いわゆる自然の教えに従って、実体的合一としてではなく、むしろ異質なものの複合（複合的合一）として考えられていることが示される。そこからさらに、現代の心身問題の状況を顧みながら、デカルトの問題は心身がいかに相互作用をなすかではなく、区別と合一とが理論と実践の次元に分離されていかに矛盾なく理解されるかにあり、しかしまたそれゆえに、そのような次元を分ける議論が心身問題の統一的な把握を阻み、理論的な不整合を残さざるを得なかったことを結論する。

最後に第13章は、『省察』の表面にはそれほど出ないが、形而上学の重要な主題である「魂の不死」の問題を取り上げる。この歴史的にも古い問題に対して、デカルトは慎重な態度をとり、魂の不死は理論的には論証可能であっても、実際に不死かどうかは神の保証をまつ他ないと考える。しかしまたデカルトの

不死論は、さらに知的記憶、連続的創造説、思惟するもの、道徳論などの哲学的諸問題とも深く関わっており、例えば不死論は身体を離れた魂が知的記憶をもち得ることの根拠と見られ、また「思惟する我」はそれ自身で存続する限り、不死性を宿しているとされ、さらにデカルトの道徳は、「死を恐れず生を愛する」と言われるように楽観的・現世的なものとされるが、それは不死への確信があってはじめて成立するのである。このように不死の問題は、ただ独立した主題ではなく、デカルト哲学の内部とさまざまに呼応していることが結論される。

論文審査の結果の要旨

近世哲学の礎石を置くデカルトの形而上学思想が、その著作『第一哲学の省察』（以下、『省察』と略称）のなかで最も詳細かつ精緻に展開されていることは周知の通りであるが、他の著作においてもその部分的ないし要約的な論述が見られ、その間の思想上の異同や変化がしばしば問題にされる。本論文は、この『省察』を形而上学的主著として中心に見据え、しかしまた随時『方法序説』や『哲学原理』などの叙述をも参照ないし援用しながら、デカルト形而上学の全体像を整合的に把握せんと試みるものである。全体の論述は、ほぼ『省察』の展開に沿っていわゆるランニング・コメンタリーを付するという体裁をとるが、論者の言うように、ここではコメンタリーの原義である「共に思惟する」という姿勢が一貫してとられ、またテキストの周到にして精密な解釈と、必要に応じた哲学史上の主要なデカルト批判への対応を通じて、デカルト形而上学の諸問題をほとんど余すところなく見渡し、全体として首尾一貫した理解を提示している。

全体は大きく三部に分けられるが、そのそれぞれに本論文の特徴的な成果が見られる。第1部では、いわゆるデカルト的懐疑とそこから取り出される「コギトの原理」(cogito ergo sum の原理)の詳細な解明がなされるが、ここで論者は「コギトの原理」が他の明晰判明な認識と異なって、それ自体で神の保証を要しない特権的な真理性をもつことを明確に指摘する。さらにまた古くから難問とされてきたいわゆる「デカルトの循環」の問題に関しても、一方では明晰判明知の規則を作業仮設と性格づけることによって、他方では神の存在証明の論述を綿密に解釈することによって、この規則の定立と神の存在証明との間いわゆる循環の疑いはないと指摘する。これらの指摘はいずれも、必ずしも論者の独創というわけではないが、綿密な読解によってこれらの問題点を関連づけ、整合的かつ説得的に解明した点は評価されてよい。

第2部では、主としてデカルトの神に関する諸問題がまとめて論じられる。まず論者はここで、デカルトが『省察』のなかで神を問わねばならなかった必然性を二つの側面から強調する。一つはその時代とデカルト自身の内的必然性であり、いま一つは『省察』の構造そのものからくる必然性である。これらの必然性に基づく神の解明に、本論文は根本的に動機づけられていると言ってよい。さらに神をめぐるここで重要な問題は、デカルトにおける神の三つの存在証明の関係についてである。論者は三つの証明を内的な連関において捉え、とくに第三のいわゆる存在論的証明を、第一・第二の証明を前提として含みつつ、存在証明そのものを完成するものとして意味づける。この点はとくに論者の優れた着眼と見られ、きわめて興味深い。いずれにせよ、神に関する問題をデカルト形而上学の中軸に置いて考察したところに、本論文の重要な特徴が現われていると言えよう。

さらに第3部では、物体（外的世界）および心身の問題を考察する。ここでの特徴的な点は、第1、2部における形而上学的・認識論的な次元から、より実践的・身体論的な次元に考察の力点が移ってきていることである。論者はここで、改めてデカルトの物体的世界の認識における感覚の意味を、身体論的な角度から見直すことを試み、またいわゆる心身問題に関しても、心身合一の世界の復権と実践的生の次元の意義を強調する。このような実践的・身体論的論理の強調は、他方における認識論的論理との間にある種の不整合をもたらして避けていこうと思われたいと思われる。論者はしかし、こうした事態はデカルト自身が『省察』のなかに残した問題であって、不整合は不整合としてはっきり認めるべきであるという態度をとる。ここに本論文における論者の基本的な姿勢が端的に示されていると言えよう。

以上のように本論文は、『省察』を中心としてデカルトの形而上学思想を統一的に把握し理解せんとする論者の意図を十分に果たし、デカルト形而上学の全体像を整合的かつ説得的に描き出すことに成功している。神、人間、世界の問題を網羅したデカルト形而上学の汎通的解釈の一つとして、高く評価されよう。しかし、本論文にもなお望まれるところがないわけではない。本論文の叙述が基本的に『省察』の内容にコメントリーを付すという形態をとるゆえの制限であろうが、考察のなかで幾度か現われる主要な思想や概念への論究が、そのつど断片的にとどまるという感を残すケースがいくつか見られる。一例をあげれば、デカルトにおける永遠真理創造説は、懐疑からコギトを経て神へと至る本論文の洞察を導くいわば根本動力をなす思想と思われるが、これに関していずれかの箇所でも集中的に掘り下げた論究がなされていれば、本論文の趣旨はいっそう明瞭になったであろう。また最後に、論者がデカルト自身の矛盾ないし不整合として指摘した点は、少なくとも『省察』のテキスト解釈としては正当であるとしても、その解決への何らかの示唆なり方向が示されてもよかったであろう。論者の今後の解明を待ちたい。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。平成7年3月1日、調査委員3名が試験を行った結果、合格と認めた。